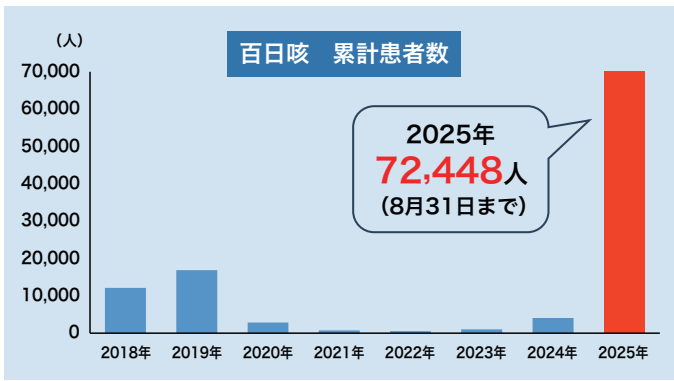


知っておきたい 診療技術

百日咳について

現在の流行状況

2025年の百日咳の患者数は、新型コロナウイルスが流行した2020年から2024年より格段に増えています。さらに、新型コロナウイルス流行前の2019年と比べても3倍以上の患者数となっています。



百日咳患者の推移

出典：国立健康危機管理研究機構 感染症情報提供サイト「百日咳の発生状況について」(https://idinfo.jihs.go.jp/diseases/ha/pertussis/020/2504_pertussis_RA.html)、IDWR 感染症週報2025年第35週(8月25日～8月31日) (https://id-info.jihs.go.jp/surveillance/idwr/jp/idwr/2025/idwr2025-35.pdf) より作成

感染、症状、経過

一般的に百日咳は、子供の病気と思われていますが、実際は大人でも罹患します。小児期のほうが重症化しやすいこともあり、大人の罹患はそれほど注目されていませんでした。

百日咳とは、百日咳菌が鼻腔・咽頭・気管支に感染して発症する疾患で、インフルエンザなどと同様に飛沫感染で周囲に広がっていきます。百日咳菌自体には咳を生じる作用はなく、激しい咳は百日咳菌が産生する百日咳毒素によるものです。感染後の症状は下記の図のように、カタル期、痙咳期、回復期と進行していきます(百日咳の経過参照)。

1歳以下の乳児は重症化しやすく、致死率は1～2%(インフルエンザの約10倍)とされています。大人の場合、咳はひどくても命にかかわるほど重症化することはまれです。ただし、合併症として肺炎や、強い咳による失神、失禁、肋骨骨折、脳卒中などを引き起こすことがあります。

カタル期

発症後1～2週間

- 鼻汁が主な症状
- 咳が少なく風邪と診断されやすい

最も感染力が強い時期

痙咳期

発症後2週間～1ヶ月

- 激しい持続性の咳
- 大量の百日咳毒素が産生される



回復期

痙咳期後1～2週間

- 次第に咳が治まる

百日咳の経過

予防

初めてから3週間程度を過ぎれば、抗菌薬の効果はあまりないともいわれています。治療には、早めの受診が重要です。

百日咳は、検査キットなどで短時間に診断できます。ただし、鼻汁以外に症状がない期間の診察では、風邪と診断されてしまうことが多いため、百日咳の患者が周囲にいる場合は、診察時に必ずそのことを医師や看護師にお伝えください。

治療

抗菌薬による治療を行います。正しく抗菌薬が投与されれば、5日程度で周囲への感染の危険性は低くなります。ただし、大量の百日咳毒素が気管支に広がり、激しい咳の症状が出る前に抗菌薬を投与しなければ、咳の改善は望めません。咳が開始

最後に

ため、10歳くらいまでは予防効果が残っていますが、それ以降の効果は期待できません。また、一度感染した方に生涯免疫(一生免疫が持続すること)はできません。大人の方でも、乳幼児と接する機会が多い方はワクチン接種をご検討ください。当院でも接種可能です(自費診療)。

新型コロナウイルス流行期に収まっていた百日咳がこれ以上広がらないためには、皆さん一人ひとりの予防が重要となります。これからも気を付けていきましょう。

(感染症内科部長 田中俊憲)